

目的 人格形成における家族関係の影響については様々な立場からの研究があるが、ここ数十年來の家族形態の変化、つまり核家族化や子供の数の減少によって生じた家族内における人間関係の量的減少は、子供の性格形成に少なからぬ影響を与えているように思われる。しかし、一方で三世代同居家族では、子供の数が減っても家族内における人間関係の全体的な量には変化がないと考えられる。本研究は三世代同居家族における役割関係と子供の性格形成の関連について分析していくことを目的として行った。

方法 秋田県南部の町立小学校の全児童を対象に質問紙調査を行った。その内容は児童の性格に関する項目（カルフォルニア人格検査を参考に作成。社交性・自己顕示性・順応的な成就欲求・自立的な成就欲求・支配性の項目について測定）、家族関係に関する好意度、そして、家族内における人間関係の対象（日常生活において、いろいろなことを誰と一緒に行うか）についての質問から構成されている。

結果 祖父母の主な役割としては「子どもをほめること」「怒られた時になぐさめること」として「学校から帰宅した子どもを迎えること」などがあつた。両親には「悪いことをした時にしかる」「宿題のわからないことを教える」という役割があり、兄弟には「遊び相手」と「喧嘩相手」という役割があつた。また、家族の人間関係が少ない（相手をしてくれる人がいない場面がある）場合、家族関係を好意的にみる程度が低く、性格形成にも影響がみられた。